

表にはピアノの鍵盤がウェーブしたイラストが書いてある。開くと、『きらきらぼし』から始まって、演奏する曲のやさしい順に並んでいる。

いつも発表会ごとにだんだん後ろになってゆくのが、うれしかった。

——メンデルスゾーン 狩の歌 小学六年 朝井麻紀

印刷された自分の名前を見るのが麻紀は好きだ。手書きには感じないぞくとした何かが、明朝体のぴんとした横線と三角の『とめ』からわき上がってくるような気がする。でも今日は、活字を見てもさっぱりそういう気がしない。

\*

あときはじめて『離れ』という言葉を知ったのだ。  
四年前だ。

川村先生の家は、古い木造平屋の家だった。門には屋根までついていた。くぐって入り、玄関に上がると、右側にガラス戸のついたわたり廊下があって、先に十畳ほどの座敷があった。これが『離れ』だ。あとで母がそう言った。この家には、めずらしいものがたくさんあると、麻紀はきよろきよるとあたりをみまわした。

床の間には、高さ一メートルぐらいの大きなつぼがあった。白よりもまだ白いものがあるというような地肌、鮮

やかな青で大きな花が書いてある。たしかこの派手な形の花は『立てば芍薬すわれば牡丹』の芍薬だ。

座敷のまんなかに、赤いうるし塗りの小さなちゃぶ台がおいてある。ひし形を複雑に組み合わせた形の彫刻がぐるりとしてある。うるしに彫刻ができるなんて知らなかった。

麻紀はそのちゃぶ台の前に正座した。縁側の手前にあるグランドピアノと、左のふすまに背をつけておいてあるソファを谷底から見あげる形になる。

父と母は、ソファに並んで腰かけた。先生は、グランドピアノのベンチ形の黒いすの角に、こちらを向いて浅く座る。

先生は白髪を染めないまま、くるくるときついパーマをかけているところが、どこか麻紀たちのおばあちゃんに似ている。太り具合も同じぐらいだ。

——同じ高校じゃったわ、十年下じゃ。

おばあちゃんは先生の名前を聞くなり、ぶ厚い同窓会名簿を調べてそう言った。

先生はピアノ屋の紹介だった。この田舎にはめずらしく芸大を出ている先生だと聞いた。

「最近、新しい生徒はとってないんです」

口を開くなり先生が、柔らかな声でそう言った。

母がどうしようか、という顔をして横目で父を見る。

この先生は生徒が多くて、一応、紹介はするが、レッス